

特集 戦後70年 今こそ“平和なくして福祉なし”

▶映画「荷車の歌」の舞台。広島から三
次へと抜ける街道沿いに沿って続く昔
ながらの農村風景。



▶ひとは福祉会の寺尾理事長(左端)
温かい笑顔と広島弁で迎えて下さっ
た。(H27・9・7)



広島 安芸高田 ひとは作業所 寺尾文尚様

先日はひとは作業所をご案内
頂きありがとうございます
た。この返事を書いている横

で千葉のこの辺りは今、強い雨が降っ
ています。9月10日(金)、利根川上流
の鬼怒川の堤防が決壊。民家や農地を

含む一帯が広範に浸水した様子、きつ
とTVでご覧になったことと存じます。
当園の立地する香取郡東庄町はその利
根川下流。もう20kmで銚子太平洋。11
日朝、その東庄町利根川堤防に立つて
見ると、普段500mの河幅は遊水緑
地(兩岸併せて500m)も飲み込んで
合わせて1kmの大河となり、漂流物を
巻き込んでゴウゴウと流れ下っている。
その勢いに上流の洪水のことを忘れて
凄いと嘆息。その水位は堤防外
より3mは高い状態。利根川本流が決
壊すればたいへんなこと。絶対決壊し
ないように造られていることになっ
ていますが、3年前の原発事故もそうだ
けれど、自然は人知の上を行く。
寺尾さん9月7日(月)、ありがとうございます
ございました。そんなに沢山の映画を見
ているわけではありませんが、昭和30年
代に放映された「荷車の歌」を寺尾さん
ご存じではありませんか。主役は三国連
太郎・望月優子・左幸子。原作は山本巴。
監督は山本薩男。舞台は広島三次。その
在の荷車稼業で駄賃稼ぎをする貧しく儉

しく生きる農民夫婦と家族、近隣の農民
の戦前から敗戦後に続く物語。広島原爆
は三次のこの家族も巻き込んでいく。今
回、ひとは作業所からご案内頂いた安芸
高田の農村風景とその映画の情景と重な
りました。当時とは時代も違い、家も建
て変わっていることですが、風景と
しての佇まいはきつと昔と案外同じなん
でしょうか。この映画が好きで、学生時
代以後、ビデオですが、俳優のせりふを
暗記するほど何回も見ました。車で三次
に至る道から見える農村風景。途中、日
本海側に流れる川(江の川上流)と瀬戸
内海側に流れる川(三篠川上流)との分
水嶺の表示がありました。寺尾さんは広
島と三次(約80kmの街道)を行き交う人
の休み処として利用者の働く食堂「さ
さき亭」、旅の疲れを癒す「縄文アイス」
の「ひとは館」を作られた。その地の歴
史と風土に溶け込んで農村地帯を活性化
する寺尾さんの「ひとは作業所」の取り
組み。広島弁で話し掛けてくれた利用者
の皆さん。既に皆様の顔は思い出すこと
は出来ませんが、広島弁の温もりは忘れ
ることはありません。
「またお世話になりますけん。そんな
きゃあ、たのむけん」。(武井)
※9/5~9/7「山口宇部なずな合宿研」
に園長以下4名の職員が参加。広島にも
立ち寄り「ひとは福祉会」を見学しました。
この様子については次号掲載予定です。

北 総 の 里

発行日 2015. 9. 28
第 231 号
(第 1 回発行)
1974年4月1日
発行所 北総育成園
千葉県香取郡東庄町
笹川い5852
☎ 0478-86-3003
FAX 0478-86-3295

北総育成園のホームページが
新しくなりました!

施設の概要や理念、利用者の様子、
園長からのお知らせ等、盛りだくさん!
ぜひアクセスしてみてください。

ホームページアドレス
<http://www.hokuso-ikuseien.org/>

Eメールアドレス
hokusoikuseien@e-sazankakai.or.jp

日 程 表

参加者：武井敏朗・保科智子・高木恭一・師岡小百合

① 6/19 (金)	快晴	辺野古米軍新滑走路建設予定地・琉球村・座喜味城跡・那覇泊 中城城跡・嘉数高台（普天間基地）
② 6/20 (土)	快晴	沖縄平和祈念公園（平和の礎）・ひめゆり平和祈念資料館・ 沖縄なずな合宿研修会初日 講演 1 園原謙 沖縄県立博物館班長 講演 2 福森伸鹿 児島しょうぶ学園施設長 講演 3 実践報告 高齢者の医療ケア 師岡小百合（北総）
③ 6/21 (日)	快晴	沖縄なずな合宿研修会二日目 講演 近藤原理先生 首里城、沖縄県立博物館見学

特集 戦後70年今こそ「平和なくして福祉なし」

(1) 沖縄なずな研修報告 (抜粋)

支援主任 高木 恭一

今回沖縄研修のメンバーに選んで頂き、充実した3日間を過ごし、多くのことを学んだ本場に有意義な研修になったと思う。私自身初めての沖縄であつたが、沖縄に対しては先の大戦で唯一の地上戦が行われ多大な被害を受けたことは知っていても、遠い地のためか今一つ実感として伝わってくるものがなかった。現地に行くことで気付

くこともあるのではと期待した。更には、現在の基地問題につながる沖縄の人々の日本という国に対する思いを知りたいと思つた。また、沖縄の歴史・文化にも興味があつた。日本の信仰や文化の最も古い部分を残したものがあつたように思われ、それと共に、中国や朝鮮半島、それに東南アジアとの関係も見られる。そんな重層的な沖縄の歴史・文化に触れてみたかつた。そして、研修で会う沖縄の多くの方々から伝わってくるであろう沖縄人の気質や思いを感じ、とにかく沖縄を肌で感じたいと思つた。そんな大きな期待半分と園長のお供で北総を代表して研修に行くことの責任をきちんと果たせるかと言ふ不安も半分抱えて出発した。

① 沖縄の歴史・文化と現在の基地問題について学ぶ

この日は一日観光だったが、観光と言つても沖縄の歴史・文化と現在の基地問題を学ぶコースで、大変有意義なものだつた。この日見たことが翌日以降の研修の理解を深める基礎になつた。那覇空港からはレンタカーで名護市の辺野古海岸に向かつたが、車窓から見る沖縄はどこまでも住宅地が続き、

農村風景は見られなかつた。緑に覆われた広い土地が見えたと思つたら、そこは米軍基地だつた。沖縄本島は車で走つてみると意外に狭いことに気付くが、その狭い土地の10%が米軍基地に取られており、さらに沖縄を狭くしている。沖縄の人たちが米軍基地を減らして欲しいと思ふのはすごく当然のことと感じる。そして辺野古海岸に着いた。辺野古の海は碧く澄み渡り、砂浜は大量のヤドカリが歩き、多種多様な貝殻やサンゴの破片であふれていた。新滑走路は海上を埋め立てて造られるので自然破壊になることは避けられない。轟音による生き物の受ける影響だつてある。ただフェンスの向こうの米軍基地の前の海の埋め立てたということは現地に行くまで認識していなかった。推進する側の考えに立つと住宅街の真ん中にある普天間基地をなくし、別の米軍基地で周辺住民への騒音被害も少ない場所に作れるのだから、多少の自然破壊はしょうがないという考えなのだろう。

② 沖縄戦の戦跡を巡り、平和を考える

沖縄戦についてはほとんど知識がなかつたが、研修直前にNHKで沖縄戦についての特集番組を見たことで大きな流れは理解することが出来た。平和祈念公園は沖縄戦の最後の激戦地となつた摩文仁の丘にあり、南側は断崖

絶壁で広大な海が広がっている。ここに造られた平和の礎には沖縄戦の犠牲者20万人以上の名前が分かる限り全て刻まれており、今も毎年追加されている。20万人と言ふのは膨大な数だが、ただ20万人の慰霊碑というようなものがない。ただ20万人の慰霊碑というようものが立っていたら、それが一人ひとりに響いて来ないだろう。それが一人ひとりの名前が市町村毎、地区毎に全て刻まれており、中には一家全滅で名前がわからないケースも親戚や近所の人の証言があれば、〇〇の二男、〇〇の三男というように刻まれている。NHKでも紹介されていた西原町は町内のどの地区も100人を超える名前が刻まれており、生き残るのが奇跡のようににさえ感じてしまう。一人一人の名前を追つていくと、ふいに70年前に生きた人たちの恐怖や悲しみや無念の思いが胸中に広がりがあふれてくる。お供え物を持ってきている地元の方もおり、園長が声を掛けると「親族だ」と言つて、何人もの名前を指さして教えてくれた。



▲炎天の平和の礎。お参りに来ていた沖縄のおじさん、おばさんが刻まれている身内の名前を教えてくださいました。H27.6.20

③ 沖繩なずな合宿研修会 二日目

前日の親睦会から参加された近藤原理先生は体調が悪いにも関わらず、1時間の講演の間、補助具にもかかわらず、時間がたつと立って話された。なずな園での利用者とのエピソードは何度も目や耳にした話だったが、沖繩に関する話は初めて伺った。沖繩が本土に復帰した直後の1974年には福祉講演会を行っており、原理先生と沖繩との関わりを深く知った。その頃のスローガンとして「差別に対しては怒りを、変化・発達には感動を、教育には科学を」という言葉を使っていたとの事だった。その後も「大らかに、細やかに、さりげなく」や「ゆとり、夢、ユーモア」など、たくさん分りやすい言葉で福祉に関わる私たちにとって大切な心構えを伝えてくれた。原理先生の言葉はまさに「やさしい言葉で深い思想」であり、私自身、北総に就職して最初に武井副園長(当時)から教わったのは原理先生の思想であり、そこが仕事をやる上での軸になっている。原理先生のその思想に共感した人は全国におり、その人たちが長崎のなずな合宿に集まり、更には沖繩や山口や北海道でも関連の研修会が開かれるなど、ネットワークがどんどん広がっている。武井園長がその仲間にいる事で、私も研修に参加出来、たくさん刺激を受ける事が出来た。

【終わりに】

今回の研修でお世話になった蒼生学園の砂川先生は、沖繩のこころを体現したような方だった。先生は「私は平和集会には1回しか出たことはない」とおっしゃられ、平和のために大切なのは平和運動に出ることではなく、日常の生活の中で平和の理念で行動していくことだと話された。「それがわかっていない人が多すぎる」と言われた。まさに平和とは一人一人が「心の中に平和の砦を築く」ことだと思ふ。宮古島出身の砂川先生は「人を押しつけて」というようなところが全くない、温和で物腰の柔らかい方だった。他の方々も千葉から来た私たちを心からもてなしてくれ、とても幸せな気持ちで沖繩での3日間を過ごすことが出来た。沖繩の若者が沖繩を離れたいと思わないこと、本土から沖繩に移住する人が多いいこの理由がわかった気がした。

◆ 沖繩なずな合宿研修に

参加して

看護師 師岡小百合

今回沖繩研修に参加させて頂いて、多くの出会いに恵まれました。なずな合宿研での蒼生学園の皆様との出会い、研修で講演して下さった先生方との出会い、近藤原理先生との出会い、そして平和の礎での戦争で亡くなられたご遺族との出会い…。実践報告も貴

重な経験となりました。多くの出会いの中で、また肌で見て体験した事で、戦争はいかなる理由があっても、絶対してはいけないという思いはとても強



太田川のほとり (126)

四千羽の折り鶴 研究委員会チーフ(支援主任) 保科 智子

研究委員会では『平和学習』として、「平和」や「命」について自分たちの身近にある問題を通して考える活動をしています。平和学習の1つとして北総では『千羽鶴折り』を毎年行っています。昭和54年に園長が長崎の近藤原理先生と出会い「平和なくして福祉なし」という言葉から、「平和だからこそ知的障害を持つこの人達の人権が保障される」ということの大切さを学びました。また、平成4年には長崎の普賢学園(現コスモス会)と姉妹の縁を結びました。長崎は原爆が投下された地。毎年、終戦した8月にむけて、利用者・職員で平和や命の大切さを考える機会として千羽鶴折りに取り組み、姉妹結縁以来22年間、夏季研修で長崎を訪ねた際には平和公園へ千羽鶴を納めることを継続してきました。また、もう1つの被爆地である広島へは昭和63年に平和を考える旅として利用者、

いものになりました。命の大切さをより深く思うようになりました。「平和なくして福祉なし」心からそう思いいます。

職員で訪ね、似島学園との交流の際、千羽鶴を納めました。その後広島へ千羽鶴を届けることは中断していましたが、平成23年に広島出身の職員が北総に来てくれた事が縁で再び千羽鶴を納めることを再開、継続しています。現在は園長の古い友人であるひとは福祉会の寺尾理事長にお願いしています。そして、東日本大震災で甚大な津波の被害にあった宮城県亘理町へもボランティア活動を続け、H24年から千羽鶴を届けています。今年も職員の夏期研修として亘理町を訪ね千羽鶴を届けることができました。また、長崎なずな合宿で園長の仲間であった沖繩蒼生学園の砂川先生との縁で、平成25年からは沖繩へも千羽鶴を届けています。太平洋戦争で想像を絶する悲惨な戦場となった沖繩も平和の大切さを深く考えさせられる地です。今年もみんなの平和のメッセージと共に、長崎、広島、東北、沖繩へと4000羽の折り鶴を北総から納めることができました。これからも知的障害を持つ利用者の命を守る北総から「平和なくして福祉なし」のメッセージを発信していきたいと思ひます。

特集 戦後70年今こそ「平和なくして福祉なし」

(2)長崎の姉・コスモス会研修報告

H27.8.6
~8.8

今夏も、姉妹施設である長崎・コスモス会へ研修に伺いました。今回は職員3名に、利用者を代表して堀川さんと佐々木さんも参加。利用者主体の支援と地域に根差した実践から学ぶものは多く、また「姉」の心からのおもてなしを受け大変充実した研修となりました。研修に参加した職員の報告を掲載致します。

※長崎コスモス会を訪問して

副園長 白樫 久子

この度8月6日7日と大変お忙しい中私達5名の研修をお引き受け頂き誠にありがとうございました。初日はお約束の時間に遅れてしまい、炎天下の下皆様にご迷惑をおかけいたしました。申し訳ありません。それでも皆様から温かいお出迎えを頂き、心からうれしく思いました。利峰先生にも出迎えて頂き、短い時間でしたがお久しぶりにお会いでき、胸がいっぱいになりました。

今回は利用者の堀川さん佐々木さんを連れていくことが出来ました。二人とも久しぶりの飛行機旅行を満喫し、しかも平成12年の交流会の演劇や踊りのメンバーです。目を輝かせて皆様の歓迎を受けておりました。受け入れ担当の

北岡先生には細やかなお心遣いを頂き、我々5名は本当にリラクセスして過ごすことが出来ました。先生もおっしゃっていましたが、遠い親戚にお会いできる喜びと感動の連続でした。

また、利一郎先生には改めてコスモス会の理念と事業展開について、丁寧に案内いただきました。ゴルフカートに乗っての移動は楽しく快適でした。この2年間の大変な中、緑豊かな広い敷地に利用者お一人おひとりの幸せを積み重ねていく実践に、熱く感動がこみ上げて参りました。それぞれのお部屋にはさりげなく一輪の野の花が風に揺られておりました。そしてその横で楽しそうに過ごされていた皆様の笑顔を思い浮かべると、23年間の姉妹提携の歴史に感謝の言葉は言い尽くせません。大変な時期を乗り越えたかけがえのない仲間とは、苦しい時間を真剣に共有したからこそ迎えられる幸せの時間があるというお話も深く心に染み入りました。

荒川先生、大町先生、横田先生、近藤先生他皆様、各事業所のご案内も本当にありがとうございました。

論所原の広大で美しい緑の一夜、「正健」さんの素晴らしいお食事、地元島原の新鮮な素材をふんだんに使ったお料理の数々、本当においしく頂きました。楽しいひと時は瞬間に過ぎてしまいました。改めて利用者保護者の思いを胸に置き、これからの仕事に全力でかし謙虚に丁寧に歩んで参りたいと思います。

同行した斎藤・藤原両職員も多くのことを学ばせていただいたと感激しております。きっと今後の仕事に具体的に生かしてくれるものと思います。本当にありがとうございます。そしてこれからも我々の姉妹の絆と深い友情が続きますことを心より祈念いたします。御礼とさせていただきます。まだまだ暑さが続くようです。皆様どうぞお体を大切に、今後のますますのご活躍をお祈りいたします。誠にありがとうございます。

社会福祉法人コスモス会
理事長 本田利峰先生
北総育成園 副園長 白樫久子
平成二七年八月一八日

※命、平和の大切さを学ぶ

藤原 加奈

8月6日(木)~8日(土)長崎研修に行かせて頂いた。

自分自身、初めての長崎。姉妹施設コスモス会本部に到着すると、暑

い中職員利用者の方々笑顔でお出迎えして下さった事にとても感激しました。見学させて頂いて、特に印象に残っているのは、手作りの素晴らしいベッドや棚や椅子等を使用していたこと。立派な竹の飾りがありそれも消臭効果があると伺いました。また、個々の部屋には名前が書いておらず、素敵な色の扉を個々に眺めることで利用者の方々が分かるようにしてあり、一人ひとりのプライバシーを尊重しながらも個性を引き出していました。ただ、規模が大ききだけではなく随所にさり気ない工夫があり、一つ一つが利用者の為に考えられている事に魅力を感じました。北総でも園長が大切にしている「一輪の花を飾る」、「動物を大切に」という理念がコスモス会でも同じように大切にされていました。私が所属している紙工芸の干支人形もコスモス会の色々な場所に飾られており、とても嬉しい気持ちになりました。



▲コスモス会は雲仙国立公園の一角にキャンプ場「論所原」を経営。この日はここで宿泊。H27.8.6

妹施設の関係の深さを感じました。研修を終え、今でも私の中で、利一郎先生のお話でおっしゃっていた、「人生最後の人に何を提供できるか。」という言葉が響いています。北総育成園利用者の方々も高齢化が進み、「私が今出来ることは何なのか」、「何をしてあげることが利用者の方々にとって良い事なのか」考える大切さを改めて感じる事が出来ました。

長崎平和公園、そして原爆資料館へ行く事も今回の研修の大きな目的でした。原爆が落とされたのは、1945年8月9日の11時2分。原爆資料館に、11時2分を針指したまま止まっていた時計がありました。数々の遺品を見て回っているうちに目を背けたくなるような苦しい気持ちになりました。話やテレビでは、戦争について聞いていたもの、実際に展示されている写真や話を聞くと言葉にならないほどの悲惨さで



▶「平和の鐘」に北総からの千羽鶴を納める。「平和なくして福祉なし」の願いが届きますように。H27・8・7

した。北総の皆で折った千羽鶴を園を代表して献納し、尊い命を失った方々に手を合わせました。

平和がなければ福祉は成り立たない。平和なくして福祉なし…。今ある平和を大切にしようとして改めて感じました。

※ゆりかごから墓場まで

齊藤 到

今回、コスモス会が経営している霊園を見学。ここは既に亡くなつて引き取り手の無い利用者の何人も骨が納骨され眠っています。お盆やお彼岸には職員利用者がお参りされているそうです。親無き後、身寄りが無くても、死んだ後の事を安心できるようにとの理事長の考えであり、真似の出来ない事だと思えます。本堂はコスモス会職員である元大工さんの手作りとか。実に見事な出来で他のお寺と比べても全く引けをとらない、寧ろ、それ以上のものでした。本堂の中には立派な仏像が安置され、仏具の殆どは、元大工であった職員と利用者の手作りだそうです。仏様の奥には納骨の棚が一面に作られています。入り口の梁の竜の彫り物も職員の手作りだそうです。本堂の壁板も利用者が磨きその上に漆を塗ったそうです。理事長である本田利峰先生の福祉の理想に取り組む姿勢に感服。そしてそれを支える職員、関係者のいること…。

第37回 保護者職員合同宿泊研修会開催

去る7月30日、今年も「第37回保護者職員合同宿泊研修会」を開催。今回の研修のテーマは「支え合って老いを歩む。これから10年先を見据えて」と題し、高齢化が顕著となった北総の現状と課題を保護者、職員と共有、利用者を支える両輪としての役割を改めて確認する機会としました。

テーマに沿った取り組みとして匝瑳市にある「しおさいホーム」への見学をこの研修会のメインとしました。「しおさいホーム」は平均年齢が66・9歳と北総のそれより10歳上回り、高齢となった利用者の方々への支援を行っておられます。当日は北総の職員に加え、保護者も15名参加。年々参加できる保護者の数は減ってきていますが、それでも何とか都合を付けて我が子のためにとご参加下さいました。

しおさいホームを

見学して学んだこと

林 直子

しおさいホームを見学させていただいて、まず初めに感じたのは「そこで暮らしている利用者の個性と職員の創意工夫がよく表れている」ということだった。建物

自体は古く、広さも今の北総を見ているせいか個室やリビングなどはこじんまりとしているようにさえ感じられた。しかし、それと同時に私が入職した3年前、半年ほどしか見ていないはずの改修前の本館と重なり、どこか懐かしい気持ちになった。今の北総は確かにきれいで広く立派に生まれ変わったが、どの部屋も同じもの同じ景色というようにも見てとれる。それは法律や制度、利用者自身のメリットを優先したうえで仕方ないことだが少し寂しさもあった。これからはこの気持ちも忘れずに今の北総なりに皆の暮らしに色を付けていければと思う。

また10年後の未来を見据えてということでは、今回のしおさいホームの見学はよい参考になったといえる。おそらく北総の利用者も最後まで「働くこと生きること」を人生の軸としていくと思う。そのためにはそれを支える職員も日々変わっていく環境や利用者に寄り添う覚悟が必要なのだと感じました。まずは今の自分出来ることをしっかりとやっていきたいと思う。貴重な経験ありがとうございました。

街道をゆく

129

ごちゅうあん
其中庵の山頭火

武井 敏朗

山頭火がその晩年、昭和7年9月から7年程、住み着いたのが小郡の「其中庵」。故郷の防府からは程近い。庵は茅葺屋根。四畳半と三畳の二間、そして土間と便所。外の井戸は裏口から10m。なつめの木が横に生えている。一人住まいの庵として申し分がない。

- ・曼珠沙華さいいてここが私の寝るところ

彼はその前日まで川棚温泉で世話してくれる仲間と浴びるように酒を飲んでいた。彼を面白がる旦那は国森樹明。しかし、時々はそのような接待・酒浸りが煩わしくなる。それは即ち独善弧調の侘びしさを伴った。今度手に入れたこの庵で「やっと一人に」なれる。彼は喜んだ。しかし、求めたその一人住まいの静寂がどうしても落ち着かない。酒友国森が一升抱えて訪ねてきた。その足で小郡の町を飲み歩く。いよいよ自責の念は深まる。「このていたらくはどうしたこと

か。こうして生きていてどうするんだ：」。

昭和24年10月NHKラジオで彼の話が近所の人の話として語られた。「今から十四、五年前に一人の旅僧らしい男が、どこから来たもなく住みついて、近所の人とは交際することもなく、昼は薄汚い衣に鉄鉢をもって行乞し始めましたが、ときにはどこで呑んだのか、ぼろぼろに酔っ払って帰ることがあるかと思えば、二、三日は家ばかり閉じこもって、机にしがみつきの何やら一心に書いている姿も見えて、近所の人たちから、なものであろうと疑いの目で眺められたのでした」。



▲小郡・其中庵にて。武井園長と三浦さん。三浦さんは北総の名俳人！今回の旅で沢山の刺激を受け、目下数々の俳句を思案中…H27.9.5

その其中庵時代、日本の国は日支事変が深みにはまり、戦争一色に染まっていく。昨日まで野良仕事をしていた若者が今日は召されて出征していく。馬も人も元気なものとは入らなくなった。そして、それとは入れ替わりに戦死者の遺骨が白い箱となつて次々に帰ってくる。その白い箱を受け取りに、黒い式服をつけた若い未亡人や、老いたるチチハハが涙ながらに山口へ山口へ。山頭火はそれらの人の動きを其中庵時代にどれほど目にし耳にしたことか。彼は自分の存在に辟易とす。お国の為に何の役にも立たない存在。彼は必死の心であるがままの銃後の風景を俳句に残すことでこの時代と対峙した。

- ・ふたたび踏むまい土を踏みしめ行く
- ・いさましくもかなしくも白い箱
- ・ちつと瞳が瞳に食い入る瞳
- ・みんな出て行く山の青さのいよいよ青く

2015年(27)9月5日(土) PM2時。筆者はその山頭火の其中庵にいる。小郡郷土館が山頭火の遺品の常駐展示館になつている。そこから約500m、山頭火



▲其中庵。山頭火が座っていた場所に座る。在りし日の山頭火に思いを馳せて…

の道」が整備されている。民家の道の間の辻に山頭火の句が標識になつていて最後は其中庵に辿り着く。

その其中庵は日中開放されていて誰でも、その中に入ることができる。その他の客は誰もいない。山頭火の座った場所、山頭火が使った書机に向かつて座った。今、戦後70年ということ、日本の国は大きく揺れている。山頭火が生きていたら、この時代をどう詠むのだろう。

参考文献

「俳人山頭火の生涯」 大山澄太 弥生書房

みんなの広場

①「それぞれの夏休み」

お盆を挟んだ1週間、今年も夏休み外泊の時期がやってきた。保護者の高齢化、そして利用者自身の高齢化による介護度の高まりが年々顕著となり、帰宅が叶わず在園となる利用者が40名を超えた。

8月9日、帰宅日。かつては満席だった帰宅便バスも空席が目立ち、「いつてらっしゃーい」と仲間を見送る利用者の方が多い。笑顔で送り出してくれるが、やはりその胸の内は寂しさで一杯。今年66歳になったYさんは7月に兄を亡くし、外泊が出来なくなつた。「おにいさんびょうきだからね。しかたないよ」と納得はしてくれているようだが、やはり表情はいつもより暗く寂しさは隠せない。そんなYさんに同ユニットのKさんが「Yちゃん、こつち(わたし)もかえらないから。おかあさん、しんじやったからね。ここにいますからー」と励ますように声を掛けてくれた。それを聞いたYさんもおどかホッとした表情。しかし、そんなKさんも、帰宅日前日の夕方

は「みんなかえつちゃうからさびしいんだもん」と泣きながら、職員に訴えてくる様子があった。

私たちが職員はその寂しさを代わってあげることにはできない。しかしせめて少しでも紛らわせる事はできる。その為には「出番と役割のある暮らし」を整えること。これは普段からも意識している事だが、外泊中人数が少ない時こそ、より丁寧に細やかに実践されなければならぬ。館内の掃除や動物の世話、在園者で構成する作業活動では「〇〇さんが掃除してくれだからきれいになったよ!どうもありがとうございます!」「〇〇さんがいてくれて助かったよ!またよろしくお願いしますね!」等の職員はきちんと言葉に出して感謝の気持ちを伝える事が大切だ。それに加えて「相手の顔を立てる」「折り合いをつける」「立つ瀬を残す」事を心がけ、夏休み外泊期間を利用者と職員で乗り切った。(絵鳩)

②「おーい粘土下さい」

陶芸班一筋37年。その陶芸班から、今年4月、新設された「ありのまま工芸班」に移動してきた阿部信一さん。今年75歳になる阿部さんは、車椅子に乗りながら手び

ねりロクロを回し作品を作る。腕はあまり上がらない。座位もうまく保てない。それでも一生懸命にロクロを回す。働くこと生きることを37年間継続してきた阿部さんは仕事への意欲が高い。高齢に伴う体力低下からか時折ロクロに向かったまま、うたた寝をする。職員が「ベッドで少し横になりますか?」と聞くと目を覚まして「寝てないよ、仕事する」と少し怒り気味に返事が返ってくる。少ししてまた、眠っていたので声を掛けると「寝てないよ、仕事してるよ」と語気を強める。集中してロクロを回す顔は陶芸職人そのもの。元々足の不自由さはあったが若い頃は自分で歩き、タバコも酒も飲んで

いた阿部さん。今は禁煙して酒もやめた。昔から変わらぬのは口クロに向かう姿と真剣な目だと思ふ。

5月の外泊を受け入れられないからとお姉さんが阿部さんに会いに来て下さった。古い写真のアルバムを抱えて。そこには若かりし頃の阿部さんと若かりし頃の武井園長の姿があった。写真を見ながらお姉さんの話は進む。写真が進む毎にだんだんと歩けなくなつて

いく阿部さんの姿があった。私が入職する前は親子旅行があり、阿部さんも母と笑顔で写っている写真があった。当時、旅行で登山に行った際、歩行が難しくなってきた阿部さんは山へは登らず待っていることとなった。しかし、武井園長は阿部さんを背中に背負い山に登り、下山も阿部さんを背負って皆と同じようにしてくれたとのこと。阿部さんが仲間と同じ時間、同じ景色を共有できたこと、そして細やかな配慮をしてくれた園長への感謝の気持ちを母が泣きながらお姉さんに何度も話してくれたと教えて頂きました。

武井園長は見学者が来ると必ず誇らしげに阿部さんを紹介する。阿部さんは黙々と陶芸仕事に集中してやっている。見学者が帰った後、時折「園長、何て言ったの?」と聞いてくる。「良く頑張つてすごいつて褒めてくれてたよ」と伝えると返事はないが満面の笑顔。また仕事に集中する。長い年月と心のこもった支援で築かれた信頼関係は本当に凄いものだと思う。「おーい粘土下さい」今日もありのまま工芸班に陶芸職人の声が響いている。(杉本)

③「Mさんの夏休み」

外泊が近づくとうれしくなくなるMさん。今年75歳になる。Mさんの外泊はあったりなかったり。人が少なくなる北総で過ごす外泊期間はきつと、とても淋しい気持ちで過ごすのだろう。だんだんと暑くなっていくとともにMさんの元気はなくなっていった。しかし「今年の夏休み、お家帰れるよ!」と言うと嬉しそうであつた。少しづつ笑顔も戻っていった。日数が皆より少なく3日間の外泊だが「帰れる」ということは心の張りになっていくのだろう。

8月9日の朝、この日は定期外泊できる人の帰宅日。まだMさんは帰る日でないというのにカバンを持って準備をしていた。数日後、Mさんが帰宅する日「お昼食べてから帰るよ」と言うも「カバン:」「かえんだよ:」と朝からカバンをしょって何時間も待っていた。北総で日々を過ごす利用者にとって、家へ帰る帰れる家がある、というのは、とても大切な事だと思った。それがもう出来ない人も、だんだん期間が短くなってきた人もいる。一人一人の家に帰る大切さを感じて寄り添っていきなさいと思った。

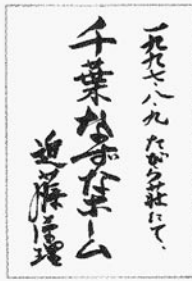
(安藤)

生活ホーム“武井ホーム”の終了とGH“野の花”開所



無数のなずなの一点。千葉なずなホームである武井ホーム。

原理先生から“千葉なずなホーム”お墨付きを頂いた。



県の制度としての生活ホームとしてその活動を開始した武井ホーム。その運営開始は今から18年前に遡るH9年のこと。武井ホームは正しくは千葉なずなホームである武井ホーム。長たらしい命名に至るには経緯がある。この武井ホームの名付け親はこの道の先駆者である長崎の近藤原理先生。原理先生は自宅を開放して障害者と共に暮らし、その共生・共育の実践を“なずなの日々”等の多数の著作や講演を通して世に問う。その原理先生が38年の歳月を経て“なずな園”を閉じられたのは2000年8月のこと。原理先生主催の研修に何回か参加し、親しく声をかけて頂くようになった。そんな経緯の中で千葉なずなホームである武井ホームは誕生。

とても原理先生の“なずなの日々”のようにはいかなかったが、親子4人と利用者3~2人の暮らしが18年維持された。北総育成園・笹川なずな工房の職員関係者にはお世話になった。武井ホーム利用者はそれぞれ次のステップに移った。

そのステップの一つがGH“野の花”の誕生。この9月1日よりその運営を開始した。建物の作りは私の故郷・信州の民家を意識した。建物でGHを比較しても意味はないがこれは立派だ。運営は笹川なずな工房。地域に広がる小さな一点だが、その期待は大きい。(武井)

編集後記



暑かった夏も涼しくなり、セミの音が鈴虫の声へ変わってきました。さて、今回初めて編集長を務めさせて頂きました。私は絵鳩さんにただただお願いだけでしたが一から教わりながら、沢山の原稿を集めることから始めました。長い編集会議を何度も繰り返し原稿を厳選し、広報紙「北総の里」が作り上げられていきます。大変な作業だと思いましたが、この作業を経て園長と何度も相談して詰めていくからこそ、より良い広報紙が完成するのだと実感しました。

今回のテーマは「平和なくして福祉なし」。8月はテレビでも終戦記念のドラマや映画が流れ、戦争・平和について沢山考えさせられます。北総の職員も夏期研修として各地へ赴きました。戦争の事を見て聞いた人、震災の被災地へ行った人、現地でしか感じられない気持ちを文章におこしてくれました。それを読み、改めて平和でない、私達の事は成り立たないのだと思いました。平和だからこそ利用者が大切にされている。この広報紙を読んでくださった皆様にもそう感じてもらえたら幸いです。

(安藤)